

講演

法曹界の女性たち

ー過去40年の経験からー

マリー・ナカニシ・ミルクス
（石川 信・訳）

本日の講演^(注1)では、過去40年間のアメリカ法曹界において、女性がどう進出しよう活躍してきたのかについて、お話をしたいと思います。まず、私のロースクール時代に遡り、その当時から今日まで、女性の立場がどう変わってきたか、そして、私が受けた教育と経験についてもお話いたします。

加えて、日系アメリカ人としての私と家族のこと、日本人を祖先にもつことの意味などを少しお話させていただきます。そのことをとおして、私が日ごろ民族・人種・性のちがいについてどう考えているのか、皆さんにいくらかでも伝われば幸いです。

そして最後に、これからの社会で活躍しようとしている皆さんに対して、法律を学ぶにあたっての心構えのようなことを若干助言したいと思います。皆さんが生きていくこれからの社会は、今まで以上に科学技術が進歩し、ずいぶんと様相の異なった社会になっていくのでしょうか…

では始めます。ハワイ大学でアジア研究を学んで卒業した私は、その後ワシントンDCに移り住み、当時ハワイの代表として合衆国議会の議員になっていたPatsy Takemoto Mink(ミンク女史)のスタッフに加わりました。ミンク女史議員は合衆国議会に選出された初めてのアジア人です。

1967年、私は彼女の下で働きながら、ロースクールに通う決心をしました。ジョージタウン大学ローセンター(夜間学部)で学び始めた当時、私は唯一のアジア人学生であると同時に、非常に数少ない女子学生のひとりでした。当時のアメリカは、男子学生の多くがベトナム戦争に徴兵されており、どの州の大学ロースクールでも多くの女子学生を受け入れていたのですが、それでもなお女子学生は数少ない存在でした。

1960年代、ロースクールで学ぶ女子学生と法曹界で活躍する女性の数は、たった5%ほどでした。私が学んだロースクールの法学部でも、過去に女子学生は一人だけだったようで、その彼女は1950年代にジョージタウン・ロースクールに在籍したのですが、その時も女子学生は彼女ただ1人でした。(なお、1950年代の法曹界で女性の占める割合は、たったの1~2%でした。)

ロースクールを修了してハワイに戻った私は、国選弁護士事務所に所属する弁護士になりました。その当時(1973年)、私はハワイで唯一の日系女性の法廷弁護士でした。当時、女性の弁護士は全体の10%以下と少数でしたが、1970年代の後半までには、ロースクールに進学する女性の数も増え続け、それとともに、女性弁護士の割合も着実に増加して15%になりました。

1981年、裁判官に任命された翌年のこと、私はウィスコンシン州のラシーヌで開かれた「女性裁判官のシンポジウム」に参加しました。その

席上、主賓のひとりである合衆国最高裁判所の女性裁判官 Justice Sandra Day O'Connor（オコナー女史）も、ロースクールに進学する女性が増えれば、それに伴って多くの女性たちが司法にかかわる仕事に就くようになるだろうと話していました。

事実として、過去40年間を10年単位に区分すると、そこに時間的な相関関係をみてとることができます。ある政治学者がいうには、「アメリカにおける女性裁判官の割合は、10年前の女性弁護士に相当する。つまり、1950年代の女性弁護士が1～2%なので1960年代の女性裁判官は1～2%であり、1960年代が4%なので1970年代の女性裁判官も4%である。」

1970年代の後半から1980年代初頭に、ロースクールにおける女子学生の割合が15%に増えました。ということは、次の10年間で、司法にかかわる女性の割合も増えたということです。

（補足：ある評論家によれば、「世界には女性の弁護士や裁判官の数がとても多い国がある。－たとえばロシアだが、男性にとっては魅力的な職業とはいえない。専門職に見合った収入が見込めないからだ。また興味深いことに、女性は教師としての収入が低すぎると不満を唱えてきたが、現在では、教師になる男性が増えてきており、そのために女性教師の収入もアップしてきている。』）

1980年代後半から1990年代の初頭までに、ロースクールの女子学生の割合は35%に達しており、1990年代の後半から2000年代の初頭までには、ハワイの女性裁判官の割合は33%で、10年前の女子学生の割合に近い数字を示しています。

1990年代の後半には、ロースクール学生の40～45%は女性で占められましたので、これまでの相関関係に従うならば、現在、ハワイの女性裁判官は40%近くに達しているはずです。しかし残念ながら、現状は33%から変わっていません。

先の相関関係に従えば、2000年の初頭には、裁判官の50%近くを女性が占めていることになります。その予想に反して、ハワイの女性裁判官の割合は増えてはいませんが、33%という数字は女性弁護士の割合とほぼ同じであり、一応納得すべき数字ではあります。

現在、William S. Richardson School of Law（ハワイ大学法科大学院）では、女子学生の割合は50～60%ですので、例の相関関係が正しいならば、少なくとも2010年までには裁判官の半数は女性が占めることになります。

ハワイの女性弁護士の人口は33%を推移していますが、興味深いのは、若い年齢層の弁護士に関する事実として、私たちの弁護士会に所属する年数が5年以下という若い年代の弁護士のうちの半分以上（51%）が女性だということです。

米国では州単位で弁護士会があり、弁護士は必ずその弁護士会に所属しているのですが、今日までにその弁護士会で会長を務めた女性はたったの2名です。その2名の女性たちが選出されるためには、並外れて優秀でなければなりません。なぜなら、投票する人たちの大半が男性弁護士だからです。端的に言えば、その地位を手に入れることができる女性は、そう多くはないということです。

女性弁護士は通常、公的機関で働く傾向にあります。公的機関で働く者

には、開業弁護士のような自由な時間はありません。まとめ役としての弁護士会会長には、旅行、会合、社交行事などに出席することが要求され、公共機関で働く弁護士のスケジュールと両立させることは難しいのです。したがって、当然のことながら、女性の方が男性よりも立候補する確率も低くなります。

* * * * *

ロースクールにおける私の指導教員も、そして弁護士になった当時の私の上司も男性でした。私が法廷弁護士として過ごした7年間に、私の前に現れた裁判官も全員が男性でした。刑事分野で日系の女性弁護士は私以外にいませんでしたし、法曹界全体でも女性はほんのわずかでした。

興味深いことに、そうした環境の中で、私に最も協力的だった判事は、Masato Doi と Yoshimi Hayasi の2人の日系アメリカ人でした。彼らは、日本人という共通の祖先をもつからこそ、親近感をもって接してくれて、しかも助力を与えてくれたのだと思います。

私のところに弁護の依頼に来るのも、おもに男性でして、女性はほとんどいませんでした。また、男性が来るにしてもアジア系の人はあまりいませんでした。この点、所属事務所の同僚弁護士や他のアジア系の弁護士たちとよく議論したのですが、アジア人は両親から「家族の恥」とか「家族の名誉を守る」というような道徳的な教えを受けて育ちますが、それが犯罪に対する抑止的な役割を果たしているのだろう、というのが私たちの共通意見でした。1980年、私は判事（裁判官）に任命されました。1980年代初頭、私はアジア系、特に日系アメリカ人による訴訟件数が増えていることに気が付き始めました。その多くはドラッグ（薬物）やお酒に関係する犯罪でした。

私は社会学者ではありませんが、薬物を使用することによって、抑圧された感情が外部に発散されると考えています。ハワイではよく、人種のちがいを次のように表現します。白人は“率直で表現力豊か(outspoken and expressive)”であるのに対して、アジア系の人々は“穏やかで有能(quiet and efficient)”であると。日系アメリカ人の州知事のひとりも、キャンペーン中は「穏やかで有能」と表現されました。

1970年～80年代、「訴訟実務の研修会」がよく開かれ、男性と女性の陪審員の違い、とくに民族／人種、そして性の違いを話し合いました。事実、陪審員を選ぶ際に、性別と人種を考慮に入れて、意図的に特定の陪審員を外すことがよくありました。

たとえば、性的暴行事件の被害者が女性の場合、陪審員の中にならず女性を含めるようにと教えられました。なぜならば、女性は同性についてより批判的で、事実を冷静にみつめることができ、加えて被告の男性には好意的だからです。また時には、日本人は同じ日本人に対して厳しく評価するので、日本人の陪審員を外すこともあります。これは、必ずしも行き過ぎた配慮ではありません。事実、ミシガン州では、もし高校の生徒が学友の裁きを受けようとする場合、自分たちの品行の悪さを批判するにちがいない仲間だけから裁かれるより、そこに大人の陪審員が含まれている方がよいと考えていることが報告されています。

とりわけ、1990年代までは、判決や評決を下す場合、事実認定の過程における平等性が強く要請されていました。それゆえに、性別、民族、人種を理由とする、陪審員の除外措置が禁止されているのです。合衆国最高裁判所や州最高裁判所は、民族／人種や性別に基づく陪審員の排除は、陪審員になるための個人の平等権を奪うものとする判決を出しています。

ハワイのほか多くの州でも、1950年代の中頃まで、女性は陪審員になることができませんでした。また、私が担当したこれまでの刑事事件において、女性が主任陪審員を務めたケースはありません。1980年代になってようやく、女性が主任を務めるケースが増え始めました。一つのエピソードを紹介します。ある席上で、私は“女性を主任陪審員に選んだ”人に祝辞を述べたところ、返ってきた返事は“彼女に投票した男性たちは、彼女にメモを取らせるために主任に選んだだけのことさ”というものでした。その言葉にはがっかりさせられましたけれど…。ともあれ、時には“hung juries”（陪審不成立ゆえに評決に至らず）に終わるケースもありますが、そのようなケースでは、例外なく男性と女性の陪審員で意見が分かれています。

陪審員の現状を研究している人たちの間で大変興味深い論点の一つに「若者世代における科学技術の影響」というのがあります。「ジェネレーションY」と呼ばれている現象です。つまり、情報があまりに速く伝わる、そしてあまりに多くの情報源から伝わるので、若い世代の陪審員は衝動的で決断力に乏しいというのです。しかし、彼らはいったん原告（たとえば、人身侵害を受けた被害者）の方に言い分があると判断すると、損害賠償額が極めて高くても問題にしないようです。

日本は、2009年から、3名の裁判官と6名の一般人で構成される「裁判員制度」を実施しようとしています。これから日本人の経験することが、果たしてアメリカやハワイで私が経験してきたことと同じなのか違うのか、興味あるところです。

この点、私の同僚と議論していて意見の一致をみたのですが、（日本における裁判員制度は）、年齢や権威や性別のちがいが今後の課題になるだ

ろうと思います。つまり、アマチュアの裁判員が訓練を受けた年配のプロ裁判官とどのように合議するのか？裁判官が裁判員に法律の内容を説明しようとする際に、裁判員は裁判官の説明にただ頷くだけなのか、それとも、実直に意見交換して異議を唱えることができるのか？また、女性の裁判員は、男性の裁判員や裁判官に脅されることはないのか？日本の若者層は年長の権威者たちの意見に従うのだろうか？

あるハワイの裁判官は、私たちに対して、日本人は感謝の念が深く、義務感が強いので、裁判員としての役割の重大性を理解さえすれば、その任務を真剣に受け止め、義理堅く発言を重ね、立派に任務を果たすだろうといったことを思い出しています。

* * * * *

さて、21世紀初頭の10年間、法曹界で活躍する女性は増えたのでしょうか。ある人は上限に達したというでしょうし、また別の人はいくらか減少したというでしょう。合衆国最高裁判所では、女性裁判官の数は1名だけになっています。ハワイ州の最高裁判所ではこれまで、5名定員のうち1名以上に女性が裁判官になったことはありません。一般訴訟事件レベル（より重大な犯罪、よりお金のかかる民事訴訟、陪審員による審理）において、女性裁判官の数は若干減少しています。

多くの人々は、女性たちがすでに「平等性」を勝ち得たので、さらなる機会を与える必要はないと考えているように思います。言い換えれば、やるべき事はもう済んだのだと。私は、多くの女性法曹が登場してきたからといって、女性と男性が同数になるように裁判官を任命すべきだとは思いません。すでに十分すぎるほどの女性裁判官がおり、それはテレビや映画にも反映しています。今日では、ほとんどの裁判長が女性なのです。

ハワイでは、次の5年間に、州の裁判官に幾つか空席がでます。女性裁判官の数がこれまでと変わらないか、傾向分析どおりに増えるのか、興味深いところです。

私が受けた教育と職業について

話をすこし横道にそらせて、ひと言わせていただきます。私は日系アメリカ人として生まれ育ち、偉大な伝統的価値をもつ日本と、エネルギーで斬新的なアメリカの2つの文化が融合する環境で育ったことを大変誇りに思っています。あたかも詩人のカール・ジブラン（レバノン系アメリカ移民）^(注2)がいうところの「ルーツと翼」を私に与えてくれたのです。

私の父は日本の広島で生まれ育ち、茶道と弓道を学びました。彼はマナーに厳しく、集中して何かを成し遂げることの大切さを教えてくれました。母はハワイ生まれですが、山口県の岩国で育ち、とても従順で両親を尊敬する女性でした。私はその母の気質を十分に受け継いでいるわけではありませんが、それでも母の気質は私のコアに宿っています。私の両親にとって大きな関心事は「私が一生懸命に学び学校で良い成績をとること、そして家族の名誉を傷つけないこと」でした。私は、よく両親が私たち兄妹を諭すのに、「ご近所様がなんて言うかしら」とか、「恥ずかしい」と言っていたのを覚えています。

私たち兄妹は良いことをすると、両親から褒められました。この「褒められる」というのはいいものです。なぜなら、ただ単にうれしいという気持ちになるだけでなく、相手の思いやりとか暖かみが伝わってくるからです。褒められることによって、“よしもっと頑張ろう”という気持ちになり、いっそう積極的な行動をとるようになると信じています。「誉め

る」というのは、私の両親がよく使った教育方法でした。そして、それは私にとって、よい結果をもたらしてくれたと思っています。

規律 (discipline) は、許されることにも限界があることを意味し、また服従 (conformity) は、ある種の気楽さはあるものの、常に束縛される人生を送ることを意味しますが、そこにとても「日本的なもの」 (very Japanese) を感じます。(アメリカでは、それを「かごの中」の人生といいますが…)。こうした日本的な育て方に加えて、アメリカ式の教育法ーリスクを恐れないこと、そして人間は誰もが個人として尊重され、大きな可能性を秘めていると信じることーもまた、私の人格形成に影響を与えました。

皆さんは、この“日本人らしさ” (your heritage) に大きな誇りをもって下さい。日本人としての原点が皆さんの性格や倫理観を形づくっています。皆さんは、日本人であることの良さを知り、それを引き継ぐ努力をすべきです。「服従する」という習性が皆さんの可能性を少なくするという理由だけで、自らの長所や優れた素質を捨てまったく新しい方向性を模索すべきだとは思いません。自分のコアとなるものや本質を形成しつつ、しかし、独創的な道へ挑戦するという態度も学ばべきだと思います。そう心掛けることによって、様々な世界の良い部分を知り、身につけることができます。もし皆さんがひとつの文化の下で生きていくならば、そう進言したいと思います。

米国では、模範となる人 (role models) ー私たちが、指導を仰ぐに足る人ーがよく話題になります。私が幼かった頃、男性の教師が少なかったので、私の role models はほとんどが女性でした。今思い返してみると、私の最初の男性の師は父親でした。彼はウェイターとして夜間に働い

ていたので、私は父とともに日中の多くの時間を一緒に過ごしました。海辺にでかけ、またバスに乗ってアートアカデミーに行って時を過ごしました。彼は私に芸術や文化の世界を教えてくれ、また、人と知り合うことの喜びを与えてくれました。

ですから、私は高校を卒業した後も、role models としての年上の男性と一緒にいると心が安らぎました。大学の教授はほとんどが男性でしたし、すでに述べましたように、ロースクールの仲間も一人を除いて全員が男性でした。しかし、法律の世界における最初の恩師は女性でした。ミンク女史議員は、日系アメリカ人女性でも弁護士になれることを証明してくれました。しかし、ミンク下院議員を除いて、この40年間の私の良き恩師は男性でした。

私は Hayashi、Doi という二人の男性裁判官から暖かい指導を受けたことをとても幸運に思っています。しかしながら、私は、日本人として受け継いだ遺産（Japanese heritage）が、彼らの権威を受け入れ尊敬し、彼らの忠告を素直に聞くよう命じてくれたのだと心から信じています。私の同僚のひとりに、日系アメリカ人ではない女性弁護士がいますが、裁判官の助言を快く思わず、私と同じようには「専門指導」を受けなかった人がいます。年長の裁判官に接する若者が心がけるべきことは、彼らを尊敬し彼らに耳を傾けることです。私は、彼らに反抗するのではなく、学生としての役割を受け入れ、彼らが私の良き先輩であり教師であることを認めました。時として、アメリカ的な自立心は逆効果になる場合もあるのです。

私は他人の言うことを聞いて育ち、そして成長しました。私の学習したことは知識となりました。そしてそれ以上に、年相応の知恵を手に入れたのではないかと自負しています。

私は現在、裁判官を引退しフルタイムで働いてはいませんが、調停員、仲裁人員として裁判官や弁護士のおそばで働いています。仲裁員として紛争を解決するように頼まれますし、また調停員として法廷闘争を避けて紛争解決の仲立ちをするように頼まれます。それは、もちろん充実感のある仕事です。

調停制度は、司法制度の一環として、裁判や陪審員による裁判と同様の機能を果たしています。これまで以上に多くの弁護士が、調停による紛争解決に期待し、費用がかかり、感情的かつ敵対的な方法で勝利を勝ち取ることにエネルギーを浪費する裁判という手続を避けるようになっていきます。女性である私は、この調停においてこそ、自分の存在価値を発揮できるものと信じています。なぜなら、脅すこともなく、きわめて人間的なアプローチで紛争を解決できるからです。訴訟の場合のような闘争的な態度をとらなくて済みます。

法曹界で活躍する私たちは、困っている人たちの相談にのり助言を与え、人々が共に生きるようにする役割が与えられていることに感謝すべきです。とても素晴らしい職業です。私は、過去40年間、そうした仕事に携わってきたことをとても嬉しく誇りに思っております。(了)

ミルクス元判事 略歴

学歴

- 1966 ハワイ大学 歴史学学士号取得(注3-ファイ・ベータ・カップ
賞受賞)
- 1965 コロンビア大学(サマーセッション)
- 1972 ジョージタウン大学ローセンター 法学博士号取得

職歴

- 1972 米国司法省 研究助手
1973－1980 国選弁護士
1980－1984 地方裁判所 判事
1984－2004 高等裁判所（注4－巡回裁判所）判事

主な専門活動

- 1980－1996 ハワイ大学ロースクール 講師
1985－現在 合衆国司法研修所 講師
1988－1990 ハーバード大学ロースクール 模擬法廷指導講師
1982－現在 アロハ司法研修所 評議員
1987－現在 合衆国司法学会 刑事部会 会員

主な地域活動

- 1986－1988 ハワイ・ガールスカウト委員会 役員
1998－2002 ハワイ・ガールスカウト委員会 委員長
1974－現在 ハワイ・スピーチリーグ 審査委員

主な表彰

- 1988 ハワイ教育局
1989 ハワイ大学
2000 ハワイ弁護士会
2004 ハワイ州女性弁護士会

主な出版物

- 『Case Screening and Selected Case Processing in Prosecutor's Office』（米国司法省）
『Meeting Defenses and Objections』 and 『The Appellate Record』
（National College of District Attorneys（国立地方検事大学）

【訳者注】

- (注1) この講演録は、2007年(平19)10月10日に白鷗大学法科大学院主催で行われた「特別講演」の内容(英語)を和文翻訳したものである。本学法科大学院では、毎年、アメリカの司法関係者を招聘して「特別講演」を開催している。その実績は次のとおりである。
- ・2006年(平18)10月12日、ブルーネット教授(Lewis & Clark Law School)『アメリカにおける紛争処理システム』(白鷗大学法政策研究所創刊号61頁～68頁所収)
 - ・2005年(平17)9月27日、ミルクス元判事『アメリカ裁判手続きの特徴』(白鷗大学法政策研究所創刊号17頁～27頁所収)
 - ・2004年(平16)11月17日、ホフマン教授(Lewis & Clark Law School)『アメリカの法曹教育～過去・現在・未来』
- (注2) 本講演録(英文67頁、和文81頁)に引用されている「Kahlil Gibran」(カール・ジブラン1883-1931)とは、レバノンで生まれ、移民としてアメリカに渡り、詩人・作家として活躍した人物である。その代表作には『THE FORERUNNER(先駆者)』(1920年)、『THE PROPHET(預言者)』(1923年)があり、アラブとアメリカの境界を越えた「普遍的な知の在り方」を追求した作品として国際的に有名である。ミルクス女史が引用する「roots and wings(ルーツと翼)」とは、2つの文化圏を統合した「普遍的な知のあり方」を意味している。
- (注3) 略歴中の「Phi Beta Kappa」(ファイ・ベータ・カッパ)とは、アメリカにおいて、きわめて優秀な成績を修めた者に贈られる、由緒ある賞のことである。主宰する「Phi Beta Kappa Society」は、成績優秀学生で構成される米国最古の学生団体で、この団体の会員であるということは、優秀な成績で大学を卒業した証であり、偉大な名誉とされている。
- (注4) 略歴中の「Circuit Court」(サーキット・コート)は、一般に「巡回裁判所」と訳されるが、その実体理解は歴史的で難しい。歴史的には概ね、District Courtに比べて、管轄地域が広い裁判所のことをいう。アメリカでは、1911年に廃止され、その後 Court of Appeal に名称統一されていく。その名残りで、現在のアメリカでも、Court of Appeal の判事を Circuit Court Judge と称することがある。本訳では日本流に、District Court を地方裁判所、Circuit Court を高等裁判所と訳しておく。

(訳者：本学法科大学院教授)